

子どもの気質的特徴についての研究

— 母親要因との関連について —

稲垣 恵里

【問題と目的】

これまで、ThomasとChessらのニューヨーク縦断的研究(NYLS)(1977 1989 1963 1969)の気質概念および9つの気質カテゴリー、①活動水準(Activity Level)②周期性(Rhythmicity)③接近性(Approach or Withdrawal)④順応性(Adaptability)⑤感受性(Threshold of Responsiveness)⑥反応の強さ(Intensity of Reaction)⑦気分の質(Quality of Mood)⑧気の散りやすさ(Distractibility)⑨注意の範囲と持続性(Attention Span and Persistence)に基づいた、Careyら(1978, 1982, 1991)による気質質問紙を用いたさまざまな研究がおこなわれてきた。ThomasとChessらの気質概念の普及の背景について庄司(1997)は、ThomasとChessらの研究の意義が認められたこと以外に、当時の発達研究において、環境要因だけでなく、子どもの生物学的要因に関心をもたれるようになったこと、また、母子関連理論の発達により、母子関係を相互的なものととらえ、相互関係の一方の主体である子ども自身の要因を考慮すべき必要性が認識されたことも背景要因として指摘できるとしている。Careyらによる気質質問紙には以下のものがある。生後4~8ヶ月の乳児を対象としたRevised Infant Temperament Questionnaire: RITQ(Carey & MacDevitt, 1978), 1~3歳児を対象としたToddler Temperament Scale: TTS(Fullard, McDevitt et al., 1984), 3~7歳児を対象としたBehavior Style Questionnaire: BSQ(McDevitt & Carey, 1978), 8~12歳児を対象としたMiddle Childhood Temperament Questionnaire: MCTQ(Hegvic, & McDevitt et al., 1982), そして生後4ヶ月未満の乳児を対象としたEarly Infant Temperament Questionnaire: EITQ(Medoff-Cooper, & Carey, et al., 1990)である。これらの質問紙の最大の特徴として、カテゴリー得点の組み合わせによって気質診断類型がも定められる。

これらの気質質問紙により測定される子どもの気質について、子どもの気質の難しさと母親のうつ病およびうつ傾向のあいだに関連があることが示されてきた(Hopkins, Cambell, and Marcus, 1987 Whiffen & Gotlib, 1989)。そして、母親のうつに関連するとされる子どもの気質カテゴリーとして、「周期の規則性」と

「注意の持続性と固執性」が、反対に母親のうつが影響するであろう子どもの気質カテゴリーとして「フラストレーション・トレランス」と「見知らぬ人・場所への恐れ」が示された(Sugawara, Toda, & Shima 1999)。子どもの扱いにくさを左右すると考えられる気質カテゴリーについては、「気分の質」、「順応性」、「接近/回避」、「活動性」があげられている(Hubert 1989 Sanson, Prior, Garino, Oberklaid, & Swell 1987)。このように、子どもの気質と母親要因の関連についていくつかのことが示されてきたが、まだ我が国における検討は十分になされたとはいえない。

本研究では、妊娠初期および産後1ヶ月、6ヶ月、18ヶ月の時期について、母親のうつ傾向、愛着、不安感と子どもの気質の関連について検討するとともに、産後の各時期の子どもの気質特徴の関連、妊娠期の母親が予測する子どもの気質と実際の子どもの気質の関連について検討することを目的とした。

【研究1】

目的 生後1ヶ月、生後6ヶ月、生後18ヶ月の各時期の子どもの気質と、母親要因である、子どもへの愛着、抑うつ傾向、育児不安との関連について検討するのが目的である。

まず、各時期の子どもの気質の9カテゴリーそれぞれと、母親要因の関連について検討する。そして、子どもを気質診断類型によって、difficult群、easy群、slow-to-warm-up群、intermediate群の4群に分類し、各母親要因について、これらの群間で差異があるか検討する。

方法 名古屋大学医学部付属病院産科を受診し妊娠中から調査に協力した妊婦で、1999年8月から2002年9月までの期間に出産した者。調査実施期間は1999年8月から2002年10月であった。各時期の調査協力者は以下のとおりである。

妊娠初期 394名(平均年齢30.33歳 男児45.9%, 女児54.1%)

産後1ヶ月 129名 産後6ヶ月 119名 産後1年半 64名

以下の尺度を用い測定した。

妊娠初期(12W~20W) 胎児への愛着, SDS, エジン

バラ, 子どもの気質予測,

産後1ヶ月 EITQ, 育児で困ったと感じる程度, SDS, エジンバラ, 愛着尺度(永田 2000)

産後6ヶ月 RITQ, SDS, エジンバラ, 愛着尺度, 育児不安

産後1年半 TTS, SDS, エジンバラ, 愛着尺度

妊娠初期については, 診察時の待合時間に回答してもらった。産後の質問紙は郵送し, 返信用封筒に入れて返送してもらった。

結果と考察

気質カテゴリーと母親のうつ傾向との関連については, 順応性と気の散りやすさで, 産後1ヶ月時と6ヶ月時とで共通して, 母親のうつ傾向との関連がみられた。産後18ヶ月では, 母親のうつ傾向と関連の見られたカテゴリーが産後1ヶ月時と6ヶ月時とは異なった。母親の愛着との関連については, 各時期の気質ごとに関連がみられるカテゴリーも時期も異なった。母親の不安との関連については, 産後1ヶ月で気の散りやすさと順応性, 産後6ヶ月でも同じく気の散りやすさ, 産後18ヶ月では周期性との関連が見られた。気の散りやすさと順応性は, 母親のうつ傾向とも関連が見られたカテゴリーである。

気質診断類型と母親要因の関連では, エンジンのかかりの遅い子どものほうが有意に母親のうつ傾向の高さと関連するという結果が得られた。

【研究2】

目的 子どもの気質について, 生後1ヶ月, 生後6ヶ月, 生後18ヶ月, 各時期の関連についてカテゴリーごとに検討することを目的とした。

方法 研究1の調査と同対象に同様の方法で実施した。

各時期の調査協力者は以下のとおりである。産後1ヶ月 129名 産後6ヶ月 119名 産後1年半 64名

各時期, 以下の尺度を用い測定した。

産後1ヶ月 EITQ 産後6ヶ月 RITQ 産後18ヶ月 TTS

質問紙を郵送し, 返信用封筒に入れて返送してもらった。

結果と考察

産後1ヶ月時のEITQと産後6ヶ月時のRITQは, 産後18ヶ月時のTTSと比べると, 同一カテゴリー間の相関が多く見られ, 異なるカテゴリー間の相関もより多く見られる。このことから, 産後1ヶ月時の気質評価と産後6ヶ月時の気質評価は, 関連が深いことがうかがえる。また, 接近/回避と順応性については, 両時期でカテゴリー相互に相関が見られ, 関連の高さが示された。これ

に対して生後6ヶ月時のRITQと生後18ヶ月時のTTSでは, 同一カテゴリーで相関が見られたのは敏感性と反応の強さのみであった。産後1ヶ月と6ヶ月の時期の子どもの気質に関連が見られ, 18ヶ月は他の時期との関連がほとんどみられなかった。1ヶ月と18ヶ月で関連がみられないことは先行研究と一致するものであったが, 6ヶ月と18ヶ月で相関の見られるカテゴリーが少なかったことは, 先行研究の結果とは異なるものであり, 今後さらなる検討が必要とされる。

【研究3】

目的 これまで子どもの気質に関する研究では, 妊娠中の親による子どもの気質評価と, 生まれてきた子どもの気質の関連についての検討がなされており, その一貫性が報告されている。研究3では, 妊娠期の母親の気質予測について, 生まれた子どもの気質との関連について検討することを目的とした。

方法 各時期, 以下の尺度を用い測定した。

妊娠初期(12W~20W) 子どもの気質予測,

産後1ヶ月 EITQ 産後6ヶ月 RITQ 産後18ヶ月 TTS

妊娠初期については, 診察時の待合時間に回答してもらった。産後の質問紙は郵送し, 返信用封筒に入れて返送してもらった。

結果と考察

母親が妊娠初期に予測した, 生まれてくる子どもの扱いにくさと, 生まれた子どもの気質診断類型の関連は, 産後1ヶ月, 6ヶ月, 18ヶ月いずれの時期においても見られなかった。よって, 妊娠初期に母親が予測した子どもの扱いにくさと, 実際に子どもが生まれてから母親が評定した, 子どもの気質診断類型における扱いにくさとの関連は薄いことが考えられた。

【今後の課題】

今回使用したEITQについては, RITQやTTSのような日本における独自の気質カテゴリーの検討は行われていない。EITQは, 生後4ヶ月未満の乳児を対象とした気質尺度であり, 生後早期の乳児の気質についての測定を可能にした点で重要である。今後EITQについて, RITQおよびTTS同様に日本独自の気質カテゴリーを検討することが求められる。

また, これまでに, TTSの保育への応用が試みられるなど(矢澤・栗崎・萩原・横山・海沼, 1999), 今後気質質問紙を実際の保育・臨床の場に活用していく手法の検討が求められていくと考えられる。